

# 中原遺跡 第3次調査

—— 戸建分譲住宅建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

2 0 1 5

埼玉県狭山市遺跡調査会

なかはら いせき

# 中原遺跡 第3次調査

—— 戸建分譲住宅建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

2 0 1 5

埼玉県狭山市遺跡調査会



# 序

狭山市域の遺跡は、中央を貫流する入間川の左右両岸に川に沿う形で所在します。いずれも当時の人々の生活を知る上でたいへん貴重なものです。しかし、昭和40年代後半より増加した諸々の開発事業により、これらの遺跡は破壊の危機にさらされることとなります。狭山市はそれら開発事業によって滅失してしまう埋蔵文化財を事前に発掘調査し、記録・保存を行っています。

本報告書は、平成22年度に実施した宅地造成事業に伴って行われた事前記録保存調査の成果報告書です。奈良・平安時代の住居遺構が発見され、隣接する遺跡群とともに同時代の人々のくらしの一端を明らかにする資料が出土しています。

この成果が今後の当地域の研究の一助となり、併せて市民の皆様の埋蔵文化財に対する理解を深め、生涯学習に資するものになれば幸いです。

刊行にあたり、発掘調査においてご理解いただいた奈良一洋氏、また、諸調整にご尽力いただいた狭山不動産株式会社、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、並びに地元関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

狭山市遺跡調査会  
会長 松本 晴夫

# 例 言

- 1 本書は、狭山市狭山地内所在の中原遺跡第3次調査の報告書である。
- 2 本書で報告する発掘調査は、宅地造成事業に伴うもので、狭山市遺跡調査会が発掘調査を実施し、調査費用は、原因者が負担した。
- 3 発掘調査届に対する文化庁及び埼玉県教育委員会の受理番号と開発原因は、以下のとおりである。  
平成23年3月31日付 教文第2-59号 宅地造成
- 4 発掘調査期間及び整理・報告書作成期間は、以下のとおりである。  
発掘調査：平成23年3月14日～平成23年3月28日  
整理・報告書作成：平成26年4月1日～平成27年1月30日
- 5 発掘調査は、石塚和則と三ツ木康介が担当した。
- 6 図版の作成と出土品の整理は安井智幸が担当した。また、名雲教子、橋本弓子、古川恵子の補助を受けた。
- 7 本書の執筆は、第Ⅱ章の2を三ツ木が行い、その他を安井が行った。
- 8 本書の編集は、狭山市遺跡調査会が行った。
- 9 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏並びに諸機関から御教示・御協力を賜った。厚く感謝の意を表する（敬称略、五十音順）。  
公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課

# 凡 例

- 1 挿図の縮尺は、以下のとおりである。また、各挿図にスケールを付した。  
遺構図：1/60、調査区全測図：1/400、遺物実測図：1/3
- 2 遺構平面図の方位は、座標北を、遺構断面図の水糸レベルは、海拔高を示す。
- 3 遺構の表記記号は、以下のとおりである。  
住居跡：SJ
- 4 出土遺物の位置を示すために、住居跡を主軸方位の線と、その中心点で直角に交わる線を基準に4分割し、カマドの右側に当たる区画を第1区、以下時計回りに2・3・4区と表記した。
- 5 遺物観察表の表記は、口径、底径、内底径、器高はcmを単位とし、( )内の数値は推定値である。  
色調の記載は、農林省農林水産技術会議事務局編集『新版 標準土色帖』に準拠した。胎土は肉眼で観察できるものを示し、焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けた。残存率は、図示した器形に対し5%単位で示したが、20%以下で特徴を示し難いものは、「破片」として処理した。
- 6 本報告書に掲載した出土品は、狭山市教育委員会で保管している。

# 目次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

図版目次

<b>I 調査の概要</b> .....	1
1 発掘調査に至る経過.....	1
2 発掘調査の組織.....	1
3 発掘調査の経過.....	2
<b>II 遺跡の立地と環境</b> .....	3
1 地理的環境.....	3
2 歴史的環境.....	6
3 遺跡の概要.....	8
<b>III 遺構と遺物</b> .....	9
1 調査成果の概要.....	9
2 検出遺構と出土遺物.....	10
住居跡.....	10
<b>IV 総括</b> .....	12

# 挿図目次

第1図	狭山市遺跡分布図	4
第2図	中原遺跡第3次調査区位置図	8
第3図	中原遺跡第3次調査区全測図	9
第4図	第3号住居跡・出土遺物	11

# 図版目次

図版1	第3号住居跡全景・カマド全景
図版2	第3号住居跡全出土遺物・出土遺物(1)
図版3	第3号住居跡出土遺物(2)・(3)
図版4	第3号住居跡出土遺物(4)・(5)
図版5	第3号住居跡出土遺物(6)・(7)

# I 調査の概要

## 1 発掘調査に至る経過

平成23年1月20日付けで、事業主体者より狭山市教育委員会（以下、市教委）の窓口へ埋蔵文化財発掘届が提出された。本開発対象地は、埋蔵文化財包蔵地（中原遺跡）に該当しているため、市教委は、平成23年2月1日に事業主体者代理人立会いのもと、バックホー（0.25）により、試掘トレンチを5本入れ、遺構確認調査を実施した。その結果、奈良・平安時代遺構4基が検出された。

事業主体者と市教委による協議の結果、大部分の遺構は、全体的に50cm程度の盛土をするため現状保存が可能となったが、道路部分の遺構1基が現状保存、設計変更ともに不可能であるため、平成23年2月3日より発掘調査を実施することで合意し、市教委は埼玉県教育委員会（以下、県教委）へ副申を添えて発掘届を進達した。この結果、検出された遺構部分にかかる50㎡について、県教委より事業者に対して埋蔵文化財発掘調査の指示が通知（例言に番号等記載）された。

事業主体者は、来年4月からの工事着手を予定しており、対応が急がれるところであったが、市教委では直営の発掘調査が実施できないため、狭山市遺跡調査会主体で発掘調査を実施した。

遺跡名	所在地	調査面積	時代
中原遺跡 (県遺跡番号22-038)	狭山市狭山 1857-1	50㎡	奈良・平安

## 2 発掘調査の組織

発掘調査（平成22年度）

狭山市遺跡調査会（主体者）          (事務局)	会長	松本晴夫	(狭山市教育委員会教育長)
	理事	中内丈夫	(狭山市文化財保護審議会委員長)
	理事	池原昭治	(狭山市文化財保護審議会副委員長)
	理事	佐藤芳子	(狭山市文化財保護審議会委員)
	理事	向野康雄	(狭山市教育委員会生涯学習部長)
	事務局長	白倉 孝	(社会教育課長)
	事務局	半貫芳男	(社会教育課主査)
	事務局	石塚和則	(社会教育課主査)
	事務局	北山誠也	(社会教育課主事)
	事務局	三ツ木康介	(社会教育課主事)
	調査担当	石塚和則 三ツ木康介	



## Ⅱ 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

狭山市は、市域中央を貫流する入間川によって分断された入間台地と武蔵野台地の境に立地する。

入間川は外秩父山地を水源とする名栗川と、青梅市に水源を持つ成木川が加治丘陵で合流して形成された河川で、比企丘陵入間台地を開析する都幾川・槻川・高麗川・越辺川・小畦川を東ねて荒川に接続し、市域から始まり荒川接続点周辺にいたる地域までの巨大な沖積平野を形成する。

沖積平野に繋がる市域の最も低い沖積面の両側には河岸段丘が見られる。段丘の内最も低い面は立川面、最も高い面は下末吉面であり、その中間に武蔵野面が存在する。

市域の最高点は、稲荷山公園南方の航空自衛隊基地内にあり、海拔高は約100mである。高度は北東に行くに従って下がり、青柳北方の川越市と隣接する地点で最も低くなり、海拔高は約29mになる。

市域の地下構造は、下末吉・武蔵野・立川のそれぞれの名を冠した礫層の上にさらに各名のローム層が乗る形になっている。下末吉・武蔵野ローム層は立川ローム層によって覆われているため、通常は露出していない。崖地でのみ観察できる。

下末吉ローム層は、下末吉面から武蔵野面へ遷移する場所でのみ観察される。主に鶴ノ木周辺の崖地で観察することが可能である。黄褐色から橙茶色の色調で、粘土化の進んだ柔らかいロームである。厚さは3～4mで、輝石と角閃石および木曾御岳火山から噴出したPm-1が含まれる層である（ただしPm-1は、市域では未確認）。

武蔵野ローム層は、下末吉面または武蔵野面から立川面に遷移する場所でのみ観察される。乾燥し易く暗茶褐色を呈し、最下部より10～20cm位に箱根火山から噴出した火山灰層である東京軽石層が存在する。輝石を多く含み、層上部に行くに従ってカンラン石が増える。

立川ローム層は市域全体を1～2m程度覆う層で、乾燥すると暗赤褐色～暗黄褐色を呈する。カンラン石・輝石を含むこの層の上部に遺構が存在するため、市域の発掘調査における遺構確認面の大多数は立川ローム層に設定されている。

市域の北側となる左岸は武蔵野・立川面の二段、南側となる右岸は、これに下末吉面を加えた三段の河岸段丘を形成している。奈良・平安時代の市内遺跡は市域の河川の中でも入間川を中心にして分布するものが多い。

入間川左岸は、武蔵野台地の一部である入間台地に属し、北から宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、御所の内遺跡、小山ノ上遺跡、鳥ノ上遺跡、富士塚遺跡、森ノ上遺跡と存在し、若干離れて今宿遺跡、上広瀬古墳群、金井上遺跡、宮地遺跡、東八木窯跡群等が連綿と带状に続く。これら一連の遺跡群は時代が下るにつれて下流から上流へと形成されていく傾向がある。

入間川右岸は、武蔵野台地に属する旧多摩川の隆起扇状地で、北から稲荷上遺跡、揚楯木遺跡、坂上遺跡、戸張遺跡、中原遺跡、峰遺跡、滝祇園遺跡等が左岸の遺跡群に対峙する形で集落を形成する。これら右岸の遺跡群は地下水脈が深く、湧水地点の周辺に、集中的に集落が形成される傾向がある。



第1图 狭山市遺跡分布图

## 狭山市内遺跡一覧（括弧内は県遺跡番号）

- 1 東八木窯跡群（22049）奈・平
- 2 八木遺跡（22068）縄（前・中）、奈・平
- 3 八木北遺跡（22021）奈・平
- 4 八木上遺跡（22022）縄（前・中）、奈・平
- 5 沢口上古墳群（22020）古（後）
- 6 笹井古墳群（22019）古（後）
- 7 沢口遺跡（22080）縄（早～中）、古、奈・平
- 8 宮地遺跡（22018）縄（中）、奈・平
- 9 金井遺跡（22071）中
- 10 金井上遺跡（22023）縄（草・前）、奈・平、中
- 11 上広瀬上ノ原遺跡（22005）縄（草）、奈・平
- 12 霞ヶ丘遺跡（22004）縄（中）、奈・平
- 13 今宿遺跡（22002）縄（早～中）、奈・平
- 14 上広瀬古墳群（22001）古（後）
- 15 森ノ上西遺跡（22079）先
- 16 森ノ上遺跡（22008）縄（中）奈・平
- 17 富士塚遺跡（22009）縄（中）奈・平
- 18 鳥ノ上遺跡（22010）奈・平
- 19 小山ノ上遺跡（22011）縄（中・後）、古～中
- 20 御所の内遺跡（22012）奈・平
- 21 英遺跡（22074）奈・平、中
- 22 城ノ越遺跡（22013）縄（前・中）、奈・平、中
- 23 宮ノ越遺跡（22016）縄（前・中）、奈・平
- 24 字尻遺跡（22075）縄（前～後）、奈・平
- 25 丸山遺跡（22037）縄（早・前～後）奈・平
- 26 金井林遺跡（22035）縄（前～後）
- 27 鶴田遺跡（22044）縄（前・中）
- 28 上ノ原東遺跡（22065）奈・平
- 29 上ノ原西遺跡（22063）縄（中）
- 30 半貫山遺跡（22061）中
- 31 稲荷山遺跡（22058）縄（後）
- 32 前山遺跡（22059）縄（中）
- 33 高根遺跡（22062）縄（早・中・後）
- 34 町久保遺跡（22034）縄（中）、奈・平、中
- 35 宮原遺跡（22017）縄（前～後）
- 36 下双木遺跡（22078）縄（草）
- 37 上双木遺跡（22077）縄（中・後）、奈・平
- 38 上広瀬西久保遺跡（22073）奈・平
- 39 西久保遺跡（22069）先、縄（草）、奈・平
- 40 東久保遺跡（22070）先
- 41 上諏訪遺跡（22086）縄（中・後）
- 42 滝祇園遺跡（22066）縄（草～後）、古、奈・平
- 43 峰遺跡（22024）縄（中・後）、奈・平
- 44 戸張遺跡（22026）縄（前・中）、奈・平
- 45 揚楯木遺跡（22027）縄（前・中）、奈・平
- 46 坂上遺跡（22029）縄（中）、奈・平
- 47 稲荷上遺跡（22032）縄（前・中）、奈・平
- 48 上中原遺跡（22039）先
- 49 中原遺跡（22038）縄（早～後）、奈・平**
- 50 沢台遺跡（22079）縄（中）、奈・平
- 51 沢久保遺跡（22041）縄（中）
- 52 下向沢遺跡（22042）縄（中・後）、奈・平
- 53 吉原遺跡（22067）縄（前）
- 54 下向遺跡（22085）縄（前～後）
- 55 台遺跡（22084）縄（前～後）
- 56 稲荷山公園古墳群（22052）古（後）
- 57 稲荷山公園遺跡（22051）縄（中）
- 58 石無坂遺跡（22083）縄（中）奈・平
- 59 富士見西遺跡（22082）縄（中）、奈・平
- 60 富士見北遺跡（22072）縄（前・中）、奈・平
- 61 富士見南遺跡（22081）縄（中）
- 62 町屋道遺跡（22088）縄（前～後）、奈・平
- 63 七曲井（22046）中
- 64 堀兼之井（22047）中
- 65 八軒家の井（22076）中
- 66 八木前遺跡（22087）縄（前・後）
- 67 堀難井遺跡（22089）中

## 2 歴史的環境

先土器時代の遺跡としては、平成2年度から平成3年度にかけて（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した西久保遺跡（39）発掘調査において、先土器時代の石器製作跡が多数発見され、本市における当該期の一端が明らかとなった。狭山市遺跡調査会でも、平成6年度に同遺跡の発掘調査を行っており、武蔵野台地第4層下部の良好な資料を得ている。また、宮地遺跡（8）では細石刃、細石核が表採されている（城近他1972）。

縄文時代の遺跡は、大略草創期から後期後半までが確認されている。概観すると、前期黒浜期に集落の明確化、遺跡数の増加等、大きな動きが認められるが、数的には中期中葉から後葉のものが大勢を占めており、この時期偏差が市内の縄文遺跡を特徴づけている。過去の調査事例もこの時期に集中する。

市内遺跡は、表面採集資料による時期決定も含めてであるが、縄文時代中期には遺跡数が39箇所と急増し市内遺跡全体の60%を超え、遺跡数の増加、集落規模の拡大が顕著となる。しかしながら、中期終末から後期初頭では、周辺地域にも認められるように集落規模は急速に縮小する。入間川左岸においては、森ノ上遺跡（16）の他、宮地遺跡、字尻遺跡（24）、右岸では揚楡木遺跡（45）等、中期末から後期初頭の柄鏡形住居跡が数軒単位で検出されるにとどまり、市内各地で集落の縮小、住居軒数の急激な減少が看取できる。柄鏡形住居跡は、周辺の入間市・飯能市・日高市でも多くの検出例があり、県内でも入間地方は本種遺構の分布密度が濃いことで知られている。ただし、森ノ上遺跡や字尻遺跡のように当該期のみに限定された集落は稀有な存在と言えよう。なお、入間川左岸に立地する今宿遺跡（13）では、中期末の張出部を持たない径3m前後の小型住居跡が確認されている。本種住居跡は、日高市宿東遺跡でも検出例があり、系統や柄鏡形住居跡との共存関係等、興味深い問題が提起されている（渡辺1998）。

縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺構・遺物の確認例は非常に少なく、森ノ上遺跡で土壌中より弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる土器が一点報告されているのみである（安井2005）。

古墳時代の遺跡は、沢口上古墳群（5）、笹井古墳群（6）、上広瀬古墳群（14）、稲荷山公園古墳群（56）と滝祇園遺跡（42）が所在する。現在までに調査が実施されたのは笹井古墳群、上広瀬古墳群で、7世紀後半のものと考えられる。笹井古墳群は石室の構造が特異なため、奈良時代以降の墳墓の可能性もある。当該期の集落遺跡には滝祇園遺跡があり、鬼高期に近い時代の土師甕や坏が出土している（小淵他1983）。

奈良・平安時代の集落は、入間川左岸に帯状に23遺跡あり、右岸は久保・不老川流域のものを含めて14遺跡存在し、住居跡や掘立柱建物跡等の遺構群が検出されている。これら遺構群は、出土遺物を基に時代推定が行われ、8世紀初頭から10世紀末までの間、1世紀を四半期に分割した大略12期に分類して報告されている。市域の集落は、高麗郡が建郡された霊亀二年（716年）よりやや時代の下った8世紀中頃から形成され、その後9世紀第2四半期ごろにピークを迎えた後、次第に数を減らしていく傾向にある。

8世紀第1・2四半期に、入間川両岸にある宮ノ越遺跡（23）、森ノ上遺跡、小山ノ上遺跡（19）、揚楡木遺跡が形成され始めているが、他期に比べて検出されている遺構・遺物数が少ないため不明な点が多い。指標になっているのは須恵坏で、特に底部の調整技法が観察できる物の内、回転糸切離し後に丁寧に底部前面～体部下位がヘラで調整された、底径と口径の差があまり無く、器高が低いものが当該期に分類されている。他期の須恵坏に比べて口径が大きいものが多く、宮地遺跡第16号住居跡及び宮ノ越遺跡第31・32・56号住居跡出土遺物が主な指標になる。また、それより僅かに時代が下る宮地遺跡第32号住居跡出土

遺物も底径の減少という新要素と並行する点から遷移期の指標としている。なお、これに後続する宮ノ越第29・58号住居跡出土遺物を酒井清治氏は国分寺創建事業が終わる時期に充てている。

若干時代が下る8世紀後半に分類される遺構は、基準とする須恵器の編年がやや不明瞭なために分類されている遺構・遺物の数量が少ないが、当該期に含まれるものが前後に分類されている可能性も否定できない。指標にしているのは小谷B1号窯（比企郡鳩山町）出土遺物で、口径・底径共に前期より縮小し、底部の周辺回転ヘラ削り・手持ち周辺ヘラ削りが主体となる。これに後続するのは將軍沢2-B-2・C-3号窯（比企郡鳩山町）製品だが、市内遺跡における南比企産の個体数が少ないため、直接これに繋げてはいない。

9世紀前半の指標になっているのは、森ノ上第11・18号住居跡出土遺物で、須恵器底部の調整が全面ではなく周辺部のみ施されている。器高は前期よりやや高くなり、口径・底径は縮小する傾向にある。縮小傾向は口径より底径においてより顕著に見られるため、底径と口径の差が大きくなる。当該期の遺構は入間川左岸の宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡（22）、上広瀬上ノ原遺跡（11）、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、宮地遺跡に見られる。

9世紀中頃に、入間川左岸では宮ノ越遺跡から城ノ越遺跡、御所の内遺跡（20）、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、上広瀬上ノ原遺跡、霞ヶ丘遺跡（12）、今宿遺跡、金井上遺跡（10）、宮地遺跡へと連綿と集落が形成され、右岸でも稲荷上遺跡（47）、揚櫓木遺跡、峰遺跡（43）、戸張遺跡（44）、中原遺跡（49）、滝祇園遺跡へと、やはり帯状に集落が形成されている。この頃に見られる人口の増加とそれに伴う東金子窯跡群製品の普及は、承和12年（845年）に開始された国分寺の再建に連動していると考えられ、当該期の市域の集落は、これに関係する人々のものである可能性が指摘されている。

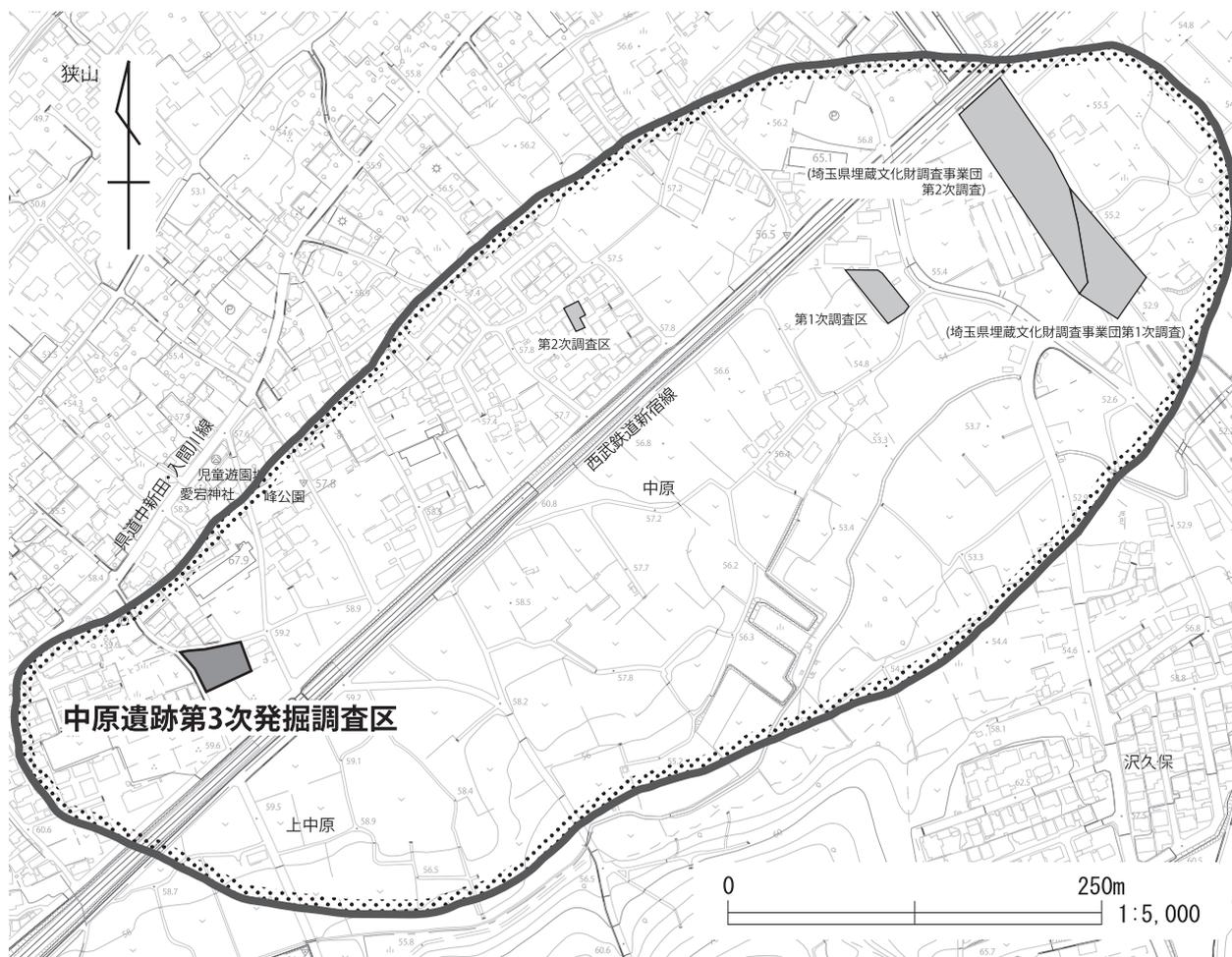
9世紀後半になると住居数は減少するが、入間川両岸の遺構密度の低下が見られる一方、集落形成範囲の縮小はほとんど見られない。当該期の遺構は宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、小山ノ上遺跡、今宿遺跡、稲荷上遺跡、揚櫓木遺跡、戸張遺跡、中原遺跡に見られ、新久A-1・2窯からD-1・3窯（入間市）の東金子系須恵器が出土する。約半数は、還元焼成が行われていない土師質須恵器の坏や碗が出現し始め、還元炎によって須恵器を焼成するための諸環境が悪化し、9世紀中ごろまで続いていた生産技術大系の変容が看取できる。

### 3 遺跡の概要

本遺跡は、狭山市狭山に所在する縄文時代早期から後期および奈良・平安時代の集落遺跡である。遺跡包蔵地範囲のほぼ中央、南西から北東にかけて西武新宿線が走り、本遺跡より南東方向およそ1.5km付近に狭山市駅が所在する。鉄道の東側は野菜畑や麦畑が広がり、昔ながらの農地の風景を留めているが、西側は、国道16号線が敷設される以前の街道沿いの市街の方向から徐々に開発が進んでおり、平成10年代以降は畑地より住宅地が多くなっている。

遺跡は、南西から西に向けて流れる沢（川）に開析された河岸丘の左岸に立地している。分布調査から推定される遺跡範囲は880×370mである。遺跡内の標高は北側が52m、南側が58mで、遺跡面は若干南に傾斜している。南西約250mに所在する入間川東小学校付近に沢（川）の水源となる湧水がある。また、南に隣接する学校法人武蔵野学院狭山の杜内にも湧水があり、これも沢（川）へ注いでいる。沢（川）周辺の低地では、若干掘削すると水が染み出す。

昭和60年に行われた第1次調査では土壌3基が検出され、平成16年に行われた第2次調査では奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒と、土壌3基が検出された。なお、第2次調査で検出された土壌を同報告書内で第1・2・3号としているが、正しくは第4・5・6号となる。お詫び申し上げますとともに訂正させていただきます。



第2図 中原遺跡第3次調査区 位置図

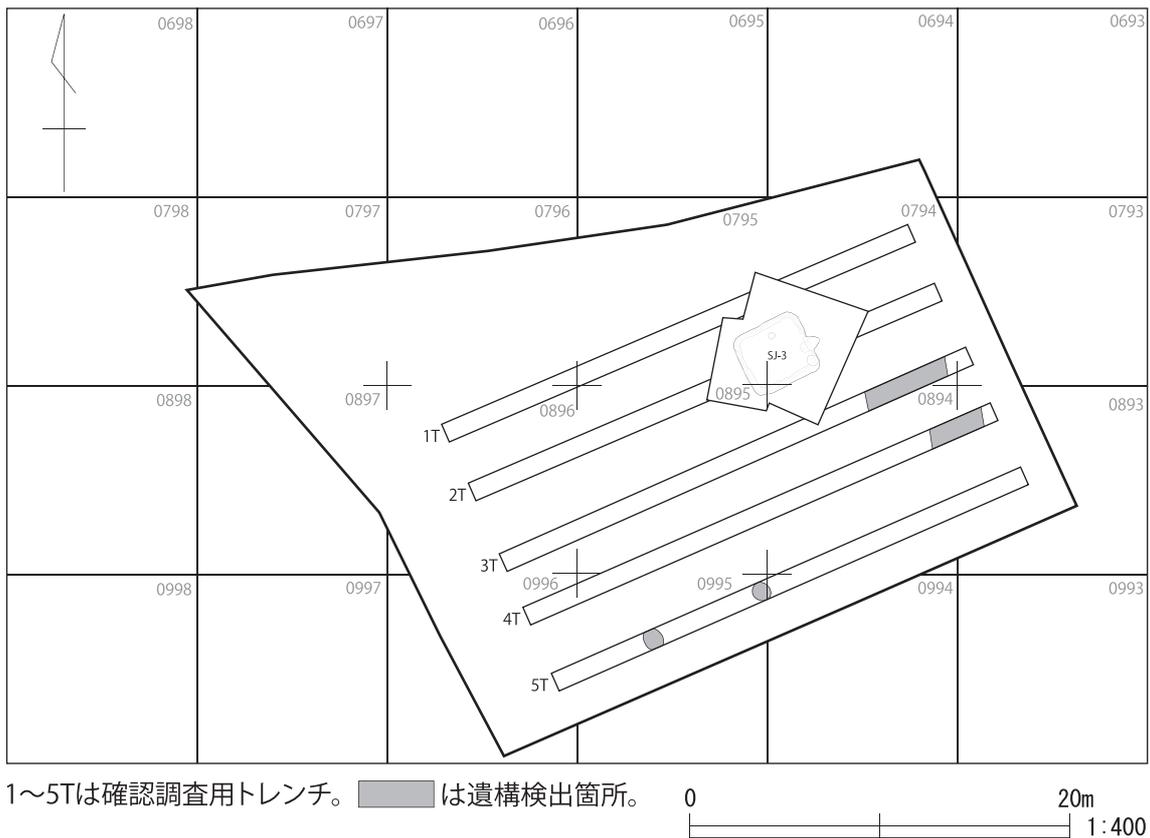
# Ⅲ 遺構と遺物

## 1 調査成果の概要

確認調査では調査対象地の輪郭に沿ってほぼ東西に5つのトレンチを設定し、重機を使用して遺構確認面となるローム面が露出するまで掘削した。結果、検出された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒と土塋2基、不明遺構1基である。このうち、土塋2基と不明遺構1基は盛土を行い現状保存されることになったため、道路予定地部分で検出された竪穴住居跡のみを対象にして本発掘調査が行われた。

遺構は、当地域で一般的な周囲に溝を持つ竪穴住居で、東壁にカマドが設置されている。カマド右脇に浅いピットが掘られていた。覆土上層は、畑作に使用するトレンチャーによって破壊されていた。

遺物は、須恵器片が672g、土師器片が703gで、8世紀末から9世紀初頭の須恵器坏・碗・蓋、土師器甕・台付甕、鉄製刀子などが出土した。



第3図 中原遺跡第3次調査区 全測図

## 2 検出遺構と出土遺物

### 住居跡

#### 第3号住居跡（第4図）

調査区中央のグリッド0794・0795・0894・0895に跨って検出された。遺構上部の覆土は畑の耕作で全体的に失われていたが、床面やカマド下部の遺存状態は良好である。平面形はやや長い長方形のプランを呈し、全体の規模は東西約3.8m、南北約3.5m、深さ約0.35mを測る。主軸方位はN-73°-Eを指す。掘り込みは浅く、硬質な床面だが、全体的に多少の凹凸がある。

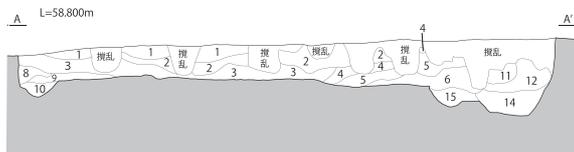
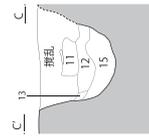
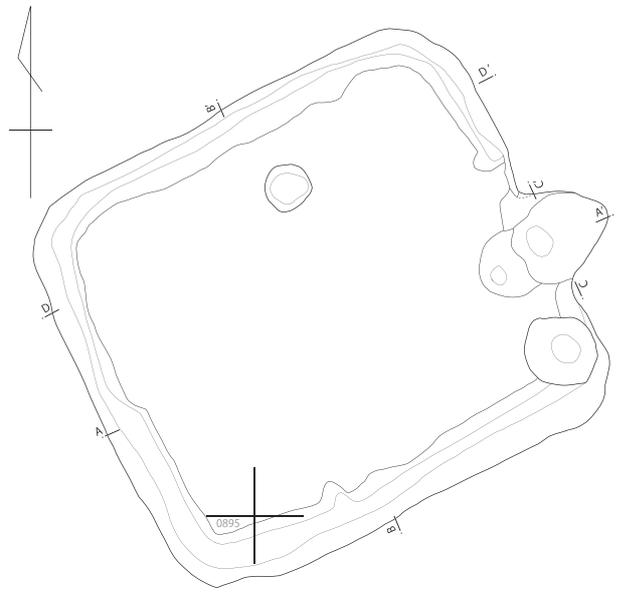
カマドは東壁中央に構築されていた。遺存状態は上部が不良で、下部は良好であった。袖部は大部分が破壊されている。カマド右脇に浅いピットが掘られていた。カマドの天井部分と考えられる白色粘土層の上部と攪乱の間から、須恵器蓋（第4図-4）が内面を上にして出土した。

検出された遺物は、須恵器、土師器、鉄製品で、その中の実測可能なもの7点を掲載した。1・2は東金子産の須恵器坏である。1は2区から出土した。器の質感は砂質かつ硬質で、還元焼成がしっかりとなされている。断面も表面と同じオリーブ灰（2.5GY6/1）で特に焼き斑はない。ロクロ目は器質の所為であまり目立たない。2は2・3区から出土した坏破片である。色調は灰色（7.5Y6/1）で、断面にも差はない。底部の糸切り痕は深く、ヘラ削り調整もやや雑な印象を受ける。器の質感は砂質かつ粉っぽいものであるが、還元焼成されている。3は東金子産の須恵器碗の破片である。3区より出土した。砂質の器で、口唇部の磨耗が著しい。色調は灰色（10Y6/1）で、断面にも差はない。底部は厚手に作られており、ヘラ削り調整が施されているが、残存破片からは全面か周辺のみか判断できない。なお、ヘラ削り調整は、体部下端に及んでいる。4は東金子産の須恵器蓋で、ほぼ完形の状態でカマドから出土した。胎土に砂粒が多く含まれている。色調は灰色（5Y6/1）である。ボタン状のツマミで、ツマミ周辺には回転ヘラ削りの痕がある。内面の中心付近に墨痕のような染みがある。5は1区から出土した須恵器蓋の破片である。色調は灰色（7.5Y5/1）で、断面に差はない。縁のカエリの整形の際に、爪先を用いている。カエリの内面側は面取りされている。6は南比企産の須恵器蓋の破片である。住居跡カマド付近の1区から出土した。色調は灰白色（5Y7/2）で、断面に差はない。直立したカエリが下部で僅かに広がる。粉っぽい質感で、角のできる部分は磨耗が著しい。7は鉄製刀子の柄部分から刃にかけての一部である。1区から出土した。

他に須恵器坏が5個体、土師器甕が2個体、土師器台付甕が2個体あったことが破片から推測可能ではあるが、図示し得るものではなかった。

#### 第3号住居跡 出土遺物観察表

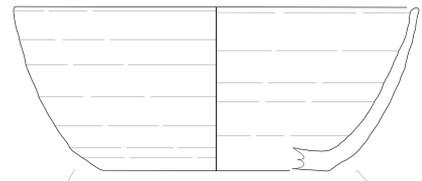
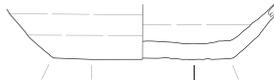
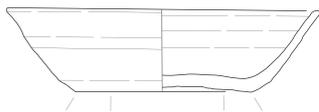
No.	器種	口径	底径	内底径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	特徴	産地
1	須恵器坏	11.8	6.9	6.4	3.3	80%	砂粒、小礫	良好	オリーブ灰	周辺回転ヘラ。	東金子
2	須恵器坏	—	(6.8)	(6.8)	—	30%	砂粒	普通	灰	周辺回転ヘラ。底部中心が出っ張る。	東金子
3	須恵器碗	(15.8)	(8.8)	(8.8)	6.5	30%	白色粒、小礫	普通	灰	周辺回転ヘラ。粉っぽい器質。	東金子
4	須恵器蓋	17.0	—	—	4.0	99%	白色粒、砂粒、小礫	良好	灰	外面上位1/3に回転ヘラ削り。釘状ツマミ。	東金子
5	須恵器蓋	(16.0)	—	—	—	10%	白・黒色粒	良好	灰	カエシの内面に爪先での整形痕と面取りあり。	東金子
6	須恵器蓋	(17.0)	—	—	—	10%	白色針状物質	普通	灰白	周辺回転ヘラ。粉っぽい器質。	南比企
7	鉄製刀子	長さ(6.6)、短辺(1.2)、厚さ(0.6)、柄・刀身(一部)									



(SJ-3)

- 1 暗茶褐色土 多量のローム粒、少量の焼土と炭化物を含む。一部ロームが偏在する。
- 2 黒褐色土 多量のローム粒、少量の焼土と炭化物、黒色土ブロックを含む。硬い。カマド側は焼土ブロックと粘土が混入する。
- 3 暗黄褐色土 多量のローム粒・ブロックを含む。他に少量の焼土、炭化物も含む。硬い。
- 4 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、粘土を含む。粘性有り。
- 5 暗灰色土 ローム粒・ブロックの他、多量の粘土と焼土を含む。硬い。
- 6 暗灰色土 第5層より粘土が少ない。
- 7 黒褐色土 若干のローム粒を含む。硬い。
- 8 黒褐色土 第7層に類似するが、締まりは不良。
- 9 暗茶褐色土 ローム粒・ブロック、焼土、粘土を含む。硬い。
- 10 暗黄褐色土 多量のローム粒・ブロックを含む。
- 11 明灰色土 白色粘土層。少量の粘土粒を含む。硬い。
- 12 赤褐色土 多量の焼土粒・ブロックを含む。遺物の出土も多い。締まりは不良。
- 13 明灰色土 第11層に類似する。白色粘土層。
- 14 暗黄褐色土 焼土粒を含む。粘性有り。灰層か。
- 15 暗黄褐色土 ローム粒と焼土粒を含む。硬い。

0 2m 1:60



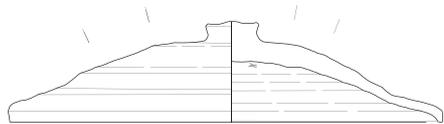
1



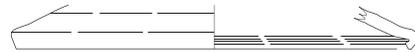
2



3



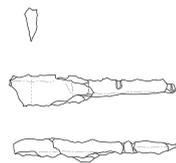
4



5



6



7

0 10cm 1:3

第4図 第3号住居跡・出土遺物

# IV 総括

## 1 遺物

須恵器は、ほとんど東金子産（652g）で占められており、南比企産はその内、第4図6の蓋のみ（20g）である。遠い南比企産のものより近い東金子産のものを多数利用しているのは、周辺遺構における傾向と同じである。坏や埴の外底部に周辺回転ヘラ削り調整が施されており、かつ口径と内底径が計測できた坏（第4図1）は、口径11.8cm、口径内底径比率（内底径/口径×100）が54.23と、8世紀末から9世紀初頭の特徴を持っている。よって、今回検出された第3号住居跡は、前回調査の第2号住居跡とほぼ同時期のものと考えられる。

## 2 遺構

第3号住居跡は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団第2次調査で検出された住居跡群と同様、ローム上面より深さおよそ40cmまでの範囲で床が検出されている。今回の結果から、先に報告した第2号住居跡が、他に比べて突出して深く作られている（深さ75cm）ことが判った。

## 3 遺跡

当遺跡の遺構の分布は、遺跡範囲北側の標高55m以上の場所に集中する。今回検出された第3号住居跡も標高59m程の地点で検出されているが、これは南側の小河川から一定の距離をとるための選地であろう。当遺跡は、北の河岸段丘崖線に沿った古くからの道を挟んではいるものの、西は峰遺跡、東は戸張遺跡に繋がる遺構群の一部、かつその南端と考えられる。

## 参考文献

（II章 遺跡の立地と環境）

- 1 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998 『宿東遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第197集
- 2 狭山市遺跡調査会 2005 『森ノ上遺跡』 狭山市遺跡調査会報告書第14集
- 3 狭山市教育委員会 1972 『宮地』 狭山市文化財調査報告Ⅰ
- 4 狭山市教育委員会 1983 『狭山市埋蔵文化財調査報告書 笹井古墳群・八木北遺跡・滝祇園遺跡』 狭山市文化財報告Ⅷ
- 5 狭山市教育委員会 1986 『狭山市埋蔵文化財調査報告書4 揚楡木遺跡』 狭山市文化財報告11

（III章 遺構と遺物）

- 6 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1999 『戸張／中原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第237集
- 7 酒井清治 2002 『古代関東の須恵器と瓦』 同成社
- 8 狭山市遺跡調査会 2005 『中原遺跡 第2次調査』 狭山市遺跡調査会報告書第16集
- 9 中村倉司 2009 『埼玉圏の原始・古代人一人の動きをモノから探る—』 p36～39 埼玉県立川の博物館

（IV章 総括）

- 10 狭山市遺跡調査会 1995 『峰遺跡』 狭山市遺跡調査会報告書第7集
- 11 狭山市遺跡調査会 2008 『峰遺跡 第2次調査』 狭山市遺跡調査会報告書第20集
- 12 古代入間を考える会 2014 『南比企窯と東金子窯（Ⅰ）』

版 图

図版一



第3号住居跡全景



第3号住居跡 カマド全景



第3号住居跡 全出土遺物



第3号住居跡 出土遺物 (1)



第3号住居跡 出土遺物 (2)



第3号住居跡 出土遺物 (3)



第3号住居跡 出土遺物(4)



第3号住居跡 出土遺物(5)



第3号住居跡 出土遺物 (6)



第3号住居跡 出土遺物 (7)

## 報告書抄録

ふりがな	なかはらいせきだい3じょうさ							
書名	中原遺跡第3次調査							
副書名	戸建分譲住宅建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	埼玉県狭山市遺跡調査会調査報告書							
シリーズ番号	第24集							
著者氏名	三ツ木康介・安井智幸							
編集機関	埼玉県狭山市遺跡調査会							
所在地	〒350-1380 埼玉県狭山市入間川1丁目23番5号 TEL 04-2953-1111							
発行年月日	西暦2015（平成27）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
なかはらいせき 中原遺跡	さいたまけんさやまし 埼玉県狭山市 さやま 狭山1857-1	22	38	35°51'48"	139°25'07"	2011.3.14 ~2011.3.28	50	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
中原遺跡 第3次調査	集落跡	奈良・平安時代	住居跡	1軒	須恵器 土師器 鉄製品			

狭山市遺跡調査会報告書 第24集

## 中原遺跡

— 第3次調査 —

戸建分譲住宅建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27年 2月26日 印刷

平成27年 3月31日 発行

発行 埼玉県狭山市遺跡調査会  
埼玉県狭山市入間川1丁目23番5号  
TEL 04-2953-1111

印刷 巧和工芸印刷株式会社

【正誤表】

中原遺跡 第3次調査

(狭山市遺跡調査会報告書 第24集)

ページ	行	誤	正
5ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007